

日本・オランダ・インドネシア三国間のわだかまり

中尾 知代

研究のきっかけ

私は1960年に生まれた戦後派です。まずこれまでに日本とオランダとインドネシアの戦争の中で、命を落とされたすべての方に謹んで戦後派から哀悼の意を表させていただきますと共に、戦後ずっと続けてこの問題に取り組んでこられた方がた、三国にわたってですけれども、それぞれの立場からの取り組みに対して心から敬意を表しております。この方がたの努力無しには私たちがいろいろな形での交流や相互理解を築き上げることは不可能であると思います。

私はもともとはイギリスの日本のイメージを研究しております。きっかけは木村先生と似ています。両親は戦前世代でございまして戦争中のイメージは子供の頃より両親から聞いています。そういう記憶を持ちながらイギリスに留学しました。そうすると、先ほどの木村先生と全く同じように「日本か。日本との戦争のおかげで俺たちはこういう目に合わされた。日本はきらいだ。」ということイギリスの方にも言われまじ、台湾、ビルマの方たちからもかなり厳しく言われました。中にはもちろん好意的なことを言ってくれる方もいらっしゃいますが、その傷の深さ、やけどかあるいは刺さったとげのような痛みがまだ残っています。とげ以外のところでは非常にすばらしい交流がありながら、今もまだその痛み先に気がいく時代であると認識し、そのとげを何とかしたいと思ったのがきっかけです。個人的な話ですが、いじめられっ子だったものですから、人がいがみ合ったり、ずれている状態を辛い、何とかしたい、と強く思ってしまう、すごく個人的な気持ちにも基いています。

天皇訪問の時のオランダの厳しい状況

先日の天皇訪蘭の時に、実際にオランダでどのような報道がなされたのか見てきましたので、まずそれを先に見せたいと思います。(OHPで写真を見せる)それから日本とオランダ、インドネシアのわだかまりがなんであるのか、という整理をさせていただきたいと

思います。本来ならばインドネシア専門の先生がここにおいでになるべきかと思いますが、センシティブな問題のせいもあり、また海外に行ってしまうれたりしてここにはいらっしやれず、私にお鉢が回ってきてしまいました。私は自分の調査で得た知識と感覚をベースに、みなさんが出されたいろいろな立場から書かれたさまざまな本を読んで、それを媒体にみなさんに整理してお伝えすることしかできません。それを最初にお断りしておきたいと思います。



まず、天皇后とオランダの女王夫妻が今から花をささげに歩いていくところです。これはテレビでごらんになったと思いますが、ちょっと注目していただきたいのは、衛兵が銃を持ってまわりをずっと取り囲んでいることです。人は石垣といいますが、まさにそんな状態なのです。厳しい警護の下にしか、この状態(天皇の献花)が起こりえないのだ、ということを感じました。

もとはダッチイスト・インディーズというオランダ領東インドの犠牲者記念碑に捧げようとしていました。しかし1991年に海部首相が花をささげた時にすぐにその花が前の池に投げこまれてしまったこともありまして、今回は第二次大戦戦没者記念碑のほうに花をささげることになったのです。お二人が捧げた花の前に立って、哀悼の意を表しているところです。

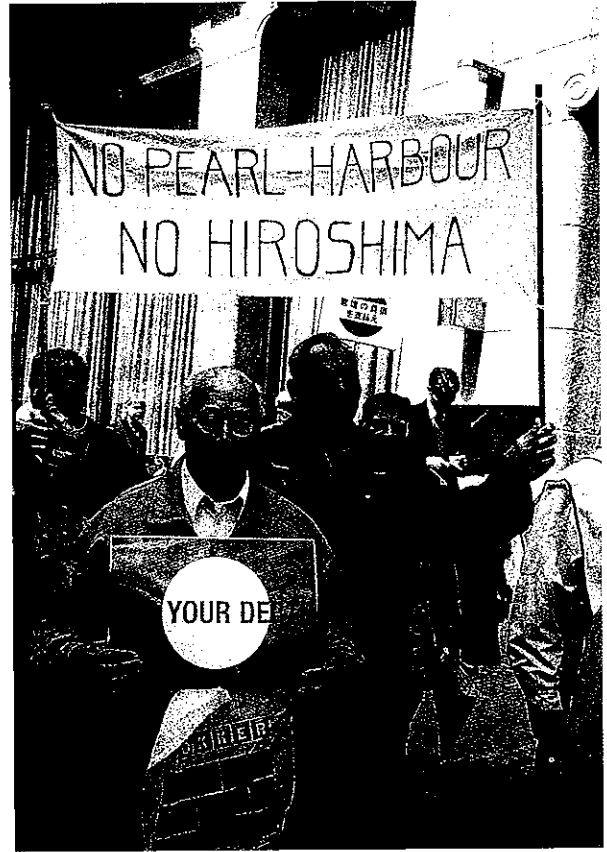
その3時間後に日本軍に抑留されていたオランダ人市民たちと元捕虜の方たちによるデモンストレーションがおこなわれました。オランダ側と日本側の事前の

話し合いによってデモと献花の直面を避ける形で3時間ずらしておこなわれたのです。これがそのデモンストレーションの状態です。こちらは花を捧げながら泣き叫んでいた女性です。彼女が叫んでいた言葉は、「私の母は収容所でなくなった。父は病気になった。私はその時のことで体に障害が残った。母を返せ、父を返せ、私を返せ。」まさに峠三吉の言葉を言っていました。



一つのポイントとしては、日本で今回のオランダ訪問は平和的にうまくいった、といわれますが、それがいろいろな配慮のもとで、日本のナショナリズムやオランダバッシングになっても困る、ということで、政治的配慮から時間をずらしておこなわれたということです。

特に翌日のハーグでおこなわれたデモでは、プラカードに「No Pearl Harbour, No Hiroshima」と書いてあります。これを学生に訳してください、と言うと、「パールハーバーを二度と起こすな。広島を二度と起こすな。」ですか、と言われるますが、違います。これは「パールハーバーなくしては広島もなかっただろう。」ということです。つまり「あなたたち日本側が起こした戦争のせいで、広島が起こったんじゃないか。」ということです。私はあとから彼に実際にインタビューしたのですが、彼はそういう意味だと言って



いました。

彼はまさにインドネシアとオランダの混血の顔をしていますが、「少年抑留所にいた僕を、原爆が救ってくれたんだ。」ということを繰り返して言っていました。この考え方は特に抑留者の間で強く広がっています。これはイギリスでもそうです。一つの理由は、抑留者がこういう苦しみをした、と言うと、日本から「原爆の被害があつて日本も苦しんだんだ、おあいこじゃないか、お前たちもひどいことをしたじゃないか。」と言われるので、「いや、そうじゃない、あれは自分たちを救ってくれたんだ、原爆がなければもっと多くの日本人も自分たちも死んでいた。」という議論に持っていくわけです。



もう一つのポイントは、デモする人々のプラカード

が降ろされたことです。デモの途中ではこういう抗議プラカードや日本国旗に赤いどくろが描かれていて、戦犯の名前、たとえばこれは曾根憲一という名前が書いてある⁽¹⁾。彼はBC級戦犯で最初に処刑された方ですが、こんなものを掲げている女性がいたのです。天皇が乗った車が通る直前のところでこういうデモをやっているのですが、天皇が通りかかる所・メディアがいる所では、さっきのプラカードや旗は全部降ろすことになっていたのです。(これは抑留者で日本政府に救済と補償を訴えている団体の合意の上だったのですが、個人個人のメンバーの間ではこういう合意はしていませんでした。)⁽²⁾

つまりこれはオランダ側の非常な気遣いで、実際にメディアが天皇とデモを撮る時にはこれらのプラカードはすべて降ろされていました。これが良かったのかもしれませんし、悪かったのかもしれません。私はいま判断を保留しています。いずれにせよ、日本に届かなかった厳しい声の代わりに、逆にいえばもっと緩やかな対話をはじめよう、というのがこの展覧会の基本ではないかと思えます。



ついでにもう1枚お見せしておきます。オランダ人元抑留者の描いた絵で、これは原爆です。抑留者の方たちがオランダの旗などを掲げています。〈原爆のおかげで私たちがやっと解放された〉、とする考え方を

表す絵です。

オランダのこだわり

やや駆け足で無謀な試みですが、三国間に何がわだかまりとして残っているのか、について話したいと思います。

オランダ側からの日本に対するこだわりの中心部分は、やはりごらんになった抑留者、および捕虜の方たちのネガティブな気持ちです。それはまず現実的な経済的苦難、当時の財産すべてを無くしたということや教育を受けられなかったということの後遺症です。

次に心理的な後遺症の問題があります。心理的な後遺症は、本人の周囲の者が経験をする場合もあります。いくつか例を聴き取りの中で聞きました。4年間収容所の中にいますと、自分が無力で何の価値もない人間だ、という思いをどこかで刷り込まれてしまう。それがいつまでも、ふっと襲ってきてしまう、というような柔らかいものもあれば、とにかく日本に関するものを見ると気持ちが盛り上がってきて、凶暴な気持ちになるというものまでさまざまです。

さらに当時、父はキャンプに、母は女性キャンプに、そして青年は青年キャンプに、といったように子供と両親が離れ離れになりました。4年間離れて暮らしていると、単身赴任以上の問題が起こりまして、その後離婚や家庭内暴力、不和になる家族がたくさんあります。

オランダに戻ってからも、3世代、4世代オランダ領東インド(インドネシア)で生まれ育った彼、彼女らにとって、オランダは全く異国でしかありません。そこに帰ってから不適應を起こしたり、あるいはオランダ側からも冷たい目で見られるということもあります。

収容所の中で、場所によっては暴行を経験した人もおり、その人たちの身体障害もあります。食糧が日本風のもので、身体にあわないという問題もありましたし、絶対的な食糧不足の中ではオランダの人たちは極端な飢えに苦しんだ場合が多く、これも各々の抑留所によりますが、その後遺症もあります⁽³⁾。

それらに対して補償金が支払われたのではないかと、ということですが、サンフランシスコ条約では、確かにまず元捕虜(軍人)への補償がおこなわれています。これは450万ポンド、日本円に直して45億2千6百万円、捕虜一人あたりに対して平均2万8千円、もちろん当時のお金です。この額面をどう評価するかは、いろいろと意見が別れます。やはり日本の感覚と受け取る側

の額の感覚には、大きくずれがありますので、そこが大きな問題です。(当時のレートは今と非常に異なるので)

またサンフランシスコ条約の後も、民間人被害者の私的な補償に対する権利をオランダ政府は保留していました。それが1956年に、1千万ドル、当時のお金で36億円払われることとなりました。11万人に対する額を、これも一人あたりに直すと91ドル。当事者としては、無くした物、家、財産、仕事、教育、あるいは築き上げた家族関係に対しては、あまりにもすずめの涙以下である、という感覚が共通のものとしてあるように思います。

オランダ人の中でのもう一つのこだわりは、訴訟の形をとっています。それは金銭的な補償と共に、非常に感情的なものです。中心にあるのはお金ではなく、謝って欲しい、認めて欲しい、私たちは人間だったということを認めて欲しい、という感覚とリンクしているように思います。彼らは、歴史的・総体的に見れば、植民地の支配者側にいたわけではありますけれども、個人としては普通の生活を送っていました。それが突然(日本軍の抑留という形で)いじめられたわけです。そのいじめられたことに対して、誰か「すまなかった。」と、わかるような形で謝って欲しいという気持ちがまずあります。そのせいで自分たちが貧しくなったのだから、それをつぐなってもらいたいという気持ちがあると、私は観察していて思います。

それを証明するのは、いわゆる白人のオランダ人で、抑留所から「慰安婦」として連れて行かれた方たちの問題です。⁽⁴⁾オランダは戦後すぐにBC級戦犯裁判で、かなり詳細な調査をし、関係者の10人が処刑および処罰を受けています。そのあともオランダ政府などが細かく調査をし、完全に強制で「慰安所」に連れていかれた人と、もしお金が入って自分の子供たちにもっと食べさせることができるのならなど、という理由で志願して行った方たちとは峻別されています。そして全く強制で行かされた方は『女性のためのアジア平和国民基金』の補償金を受け取っています。ただしその中の何人かはそれを拒絶して、「日本政府から補償して欲しい。今の日本の民間人は何もしていないので、民間からもらうのは筋違いである。民間人はもともと同じく被害者ではないか。」という気持ちから、訴訟を起こしています。

アジア平和国民基金を配った援助団体のオランダ人女性が言うには、金銭よりもそれに添えられていたお詫びの手紙、橋本首相からの手紙を一番女性たちは喜

んでいたということです。涙を流して何人からも電話がかかってきたと言っていました。英語で言うと「タッチ・ザ・ハート」でしょうか。心に届く。私たちが日常生活の中でなにかとても理不尽な思いをした場合に、金銭をぼん、と渡されるのではなくて、「すまなかったね。」と一言言ってもらえた時に初めて、相手が人間として回復する、自分も人間として回復すると同時に、自分が敵だと思っていた人たちも人間として普通にたち表れてくれる、という感動のようです。⁽⁵⁾

日本のこだわり

一方で日本のオランダ側に対するこだわりには、いくつかの要因があると思います。最もよく知られているのは「日本も苦しんだんだ。」ということ、もう一つは「オランダだって何をやったんだ。」ということです。

日本が苦しんだという側面については、いくつかあると思います。もちろん総力戦であったので、日本人が本土でも多く死に、多くの兵隊も餓死をするなり、悲惨な死に方をしたという「戦争悪」という捉え方をする、というのが一点です。

もう一つ具体的な問題としてあるのは1945年に日本が降伏した後、インドネシアが独立戦争に入った時、Japanese Surrendered Personnel (J S P・降伏日本軍人) という形で、オランダ側に抑留されていた元の軍人の方たちの辛い経験です。⁽⁶⁾イギリスに関しては、非常によく知られているのが『アーロン収容所』という本です。すべてが『アーロン収容所』に書かれた程ではないにせよ、10万6千人が抑留されてそのうち9千人が帰ってくるまでに何らかの形で亡くなりました。病気もありますし、それまでの生活(抑留所での強制労働)からの栄養不足や過労が最後にたたったこともあるでしょう。この部分がまだクリアにされていません。

もう一つはBC級の戦犯の問題だろうと思います。ソームズさんも以前おっしゃっていたことですが、オランダというのは連合国の中で日本人を戦犯として一番多く裁きましたので、「オランダが日本人を裁いた裁判の中で、すでに償いは済んでいるではないか。これだけの人間が罰を受けているではないか。場合によっては処刑されているではないか。」というのが一点です。さらに(これは常に表に出ないことで、今回正面きって展示に出たので、私は非常にいいことだと思いますが、) 処刑される前や牢獄で日本人が受けたリンチとか暴行事件に対する日本側の割り切れない気

持ちです。

私も学生を岡山大学で教えていまして、数年前にこの問題を取り上げた時に、「自分のおじいさんの友人は間違っただけで処刑されたんだ。」という事例を持ってきた学生がおりました。⁽⁷⁾その後、ご遺族の方を訪ねましたが、BC級の戦犯のボルネオ・ポンチャナックの警備隊長だった方で、本人の残した遺書を信じる限り、彼は他の人のかわりに処刑されてしまったというものです。場合によっては通訳なのに処刑された場合もあります。

ただし、これも、不当性だけが日本人にとって表に出すぎている、というのが当時、日本の裁判を手伝っていた日本人の弁護人の方の感想です。「『オランダの裁判はいいかげんだ。』と言ってばかりいるけれども、自分が見る限りはきちんとした裁判だったし、日本人はやっぱり処刑されるだけのことをした人もいた」ということを90いくつになるその方は言っていました。⁽⁸⁾ですからBC級戦犯の不当性の問題については感情論ではなくもっと綿密な調査をおこなうべきことであって、この展示会がそのきっかけになれば良いと、私は思っております。

もう一つの問題である「オランダの植民地支配という悪があるではないか」ということですが、実際にこの展示会の場合にも、最初アムステルダムでおこなわれた展示ではオランダ植民地時代の部分がありませんでしたので、日本の側のいろいろな方面から指摘がありました。それはオランダのコンテクストからすればある程度当然の話で、オランダの植民地支配の問題と日本軍占領下の問題の相関関係が意識に十分のぼっていないせいもあります。それで、日本占領以前の植民地の歴史が今回のパネルでは付け加わっております。

私がインタビューしている限りでは、「確かにオランダは植民地支配ではひどいことをした。」ということ認める動きは感じます。その典型的なものがレイ・カウスブックという方の書いた本などに出てきます。⁽⁹⁾

それと同時に、「いや、私たちはひどいことをしたといっても、3年半の間に日本人が殺したほどのアジア人は殺していないはずだ。」というふうに反論される方もいます。やはり「医療整備などをした。」ということに対するプライドがあります。記憶というのはやはり自分たちの誇りとか、自分たちが存在した意味、というものを中心に構成される、というのはどの国でも共通なのかもしれません。

「オランダ側がそれまで資源を搾取していた、だから

ら日本も略奪してよかったのか。」という反論もあります。つまり「オランダがインドネシアにしたことは確かに悪かった。でもそれが悪かったから、『日本がオランダあるいはインドネシアの一部に悪いことをしてもいい。』ということにはならないはずではないか。」と。つまり「二つの悪があるから一つは善になる。マイナスかけるマイナスがプラスになる。」というのはいかぬ、という反論を聞きます。

またこの展示会には十分出てきていないのですが、独立戦争に入った時期に、降伏日本軍人はオランダ軍の一部として協力を要請されるわけです。そうすると今までインドネシアを解放するぞ、自由独立を与えるぞ、と言ってきた日本軍の立場と当然齟齬が起こるわけです。その中で離隊日本兵とってインドネシア軍の中に入っていった独立支援をした人たちもいますし、武器をインドネシア人に工夫して回した方もいました。そういう方たちは解放を助けた、という経験をしているし、そういう気持ちで今もいらっしゃるわけです。

その時にまた「スマラン事件」といって日本人がインドネシア軍に挑む敵だ、何か悪さをするらしいといううわさが広まり、日本人がたくさん殺された事件がありました。その独立戦争時のこだわりが残っていると思います。⁽¹⁰⁾

インドネシアのこだわり

3番目に最後になりますが、インドネシアから日本に対するこだわりです。ポジティブな面という形では、例えばベタ（PETA）などが独立戦争時の当事者となっていった、ということで、少なくとも独立の気運への刺激を与えてくれた、というポジティブな評価です。⁽¹¹⁾戦後インドネシアに対して賠償および無償援助、借款、ODAとしてかなりの金額を渡しているからそれでいいのではないか、という見方もあります。さらに、展示パネルにもありますが、それまでエリート層をオランダ的に教育していた教育法と違って、日本軍政下では日本語教育やマレー語教育などを広い層に施していった、教育上の平等があった、というポジティブな記憶があると思います。⁽¹²⁾

マイナス面ですが、やはりロームシャ（労務者）・兵補・「慰安婦」の3点に絞られるのではないかと思います。ロームシャの方はベタの場合と違って、自分たちが全く消耗品として扱われた、という記憶が強い。また当時の経験をご覧になった日本人の方たちも、そういう風に言う方が多いのです。村に戻されたローム

シャを見て「どうやってこんな短期間に体がぼろぼろになって帰って来るんだろう。」という疑問が日本人にさえ沸くほどだったと。もともとインドネシア人の体が頑強ではないせいだ、という理屈もあるのですが、体を壊して死んだ、あるいは病死、あるいは見せしめとして殺された、というロームシャたちの経験がいくつも残っています。またマレーや泰緬鉄道に連れて行かれた後、みんなに置き去りにされて、国に帰れなかったロームシャのインドネシア人たちが残ってしまったことです。日本人はもちろん負けましたからその後のケアはできませんでした。連合軍は自分たちの元の植民地に戻ってくるための、自分たちの戦いに一生懸命で、戦後処理がまったく空白になって置き去りにされた普通の人たちがたくさんいる、ということです。今日ちょっと気になったのは「日蘭友好のため」というフレーズが何度か出てきたと思いますが、インドネシア人の視点を今後どのように入れるか、という点は課題でしょう。兵補に関しては未払い給与の問題があります⁽¹³⁾。

「慰安婦」に関しては女狩りおよび強姦の経験者の苦難とともに、オランダと違って直接お金が回っていない、ということが問題とされています。また戦後、元「慰安婦」だった人たちが「日本兵に囲われた女だ。」ということで周囲からの憎悪を受けたり、心身を壊したりして、多くの方が独身で一生を終わっている、ケースなど後遺症があります。これは『女性のためのアジア平和国民基金』が1997年から10年間にわたり総額3億8千万円を供与することになったのですが、これまで実際におこなわれたのは1997年と98年の3800万円ずつです。これはインドネシアの老人ホームの増築に使われまして、110人新しく入りました。しかし、これが「慰安婦」のためのお金ですよ、ということが広報されなかったため、川田文子さんの調査によると、その中に、元「慰安婦」で入った方は1人だけだそうです。現実的に苦しんだ人に直接結局効果がない、ということが問題の一つだと思います⁽¹⁴⁾。

今回はオランダのインドネシアへのこだわりや、インドネシアのオランダへのこだわりについては言及できませんでしたが、以上、いくつか今後の課題になるような問題点を整理する試みを致しました。今後、もっと事実が検討されるとともに、オランダ・日本・インドネシアの間で情報と知識を交換しあい、つきあわせ確かめていく作業が必要です。とりわけ、戦争中に経験し、現実にその場に居た方たちの豊富な経験談と

記憶を留めておくことが、わたしたちの将来にとって必要なこととつくづく感じております⁽¹⁵⁾。

どうもありがとうございました。

《注》

*オランダの捕虜・抑留者問題に関しては、以下の本を参照。

F・スプリンガー『五十年ぶりの日本軍抑留所バンドンへの旅』草思社 2000

シャーリー・フェントン・ヒューイ『忘れられた人びと—日本軍に抑留された女たち・子供たち』（教科書に書かれなかった戦争part25）梨の木舎 1998

内海愛子 H. L. B. マヒュー&M. ヌファレン『ジャワ・オランダ人少年抑留所』（教科書に書かれなかった戦争part24）梨の木舎 1997

E・リンダイヤ『ネルと子供たちにキスを—日本の捕虜収容所から』みすず書房 2000

- 1 オランダの対日裁判に関しては以下の書が参考になる
L. ファン、プールヘースト『東京裁判とオランダ』みすず書房 1997
B. V. A. レーリンク、A. カッセーゼ『レーリンク判事の東京裁判—歴史的証言と展望』新曜社 1996
牛村 圭『文明の裁きを越えて』中央公論新社 2000
『蘭印法廷(1)』東潮社 1968
茶園義男 編・解説『BC級戦犯と蘭裁判資料』不二出版 1992
- 2 オランダの元抑留者の団体は数多くあるが、日本に個人賠償を求める抗議団体は、例えばSJE（日本の道義的責任財団）、EKNJ（Foundation for Ex-Prisoners of War in Japan and their Relatives）。またJIN（占領下でオランダ人・日本人・オランダ系インドネシア人の間に生まれた子供たちの会）も日本を訪問している。
- 3 食糧の問題に関しては、拙論「戦争捕虜問題の比較文化的考察—『食』の問題を中心に」『季刊戦争責任研究』第22、23、26号（1998—1999）参照。
- 4 オランダ政府の調査書的全訳・裁判記録は『季刊戦争責任研究』第3、4、6号（1994）
秦 郁彦『慰安婦と戦場の性』新潮選書 1999 216—218頁
- 5 女性のためのアジア平和国民基金のあり方に関しては諸問題があり、議論は今後も必要であるが、ここでは、被害者の求める対象が単なる物質では無い例として挙げた。
- 6 JSPに関する論文には、
喜多義人『日英交流史 第3巻 軍事』東京大学出版会 近日刊
大庭定雄『ジャワ敗戦抑留日誌1946—7』竜溪書舎 1996（展示会の中のビデオに出演）

本展示会でも、タンジュン・プリオクで抑留されたJSPであり、後遺症で帰国後まもなく亡くなったという方のご子息が貴重な資料を持ってきてくださった。記して感謝します。

- 7 海野馬一氏の遺書は、原本の写しを今村均が行って日本に持ちかえり靖国神社にある。写のコピーの1部は中尾が保存している。
- 8 西山要氏に関する聴き取りより。西山氏の著作は近刊とのことである。
- 9 ルイ・カウスブルック『西欧の植民地喪失と日本』草思社 1998
- 10 総山孝雄『ムルデカ！ インドネシア独立と日本』善本社 1998
菊池秀広『ムルデカ（独立）に喝采を』講談社 2000
占領下の新聞社のあり方への批判は、浅野健一『天皇の記者たち—大新聞のアジア侵略』スリーエーネットワーク 1997 がある。
- 11 PETAの指導教官の回想録に関しては、森本武志『ジャワ防衛義勇軍史』竜溪書舎 1992
- 12 日本占領下の教育者の回想録に関しては、鈴木政平『日本占領下 バリ島からの報告』草思社 1999
- 13 未払い貸金問題は複雑な様相を示している、訴えている団体の趣旨は、日本インドネシア兵補協会編著『インドネシア兵補の訴え』（シリーズ・問われる戦後補償 5）梨の木舎 1993 参照。
- 14 『インドネシア 侵略と独立』（アジアの声 第13集）東方出版 2000 84頁
「アジア女性基金創立5周年における基金活動報告書 各国別実施状況」によれば、2000年8月の段階で施設数11、124名入居。
この点に関しては、以下の本を参照。
秦 郁彦『慰安婦と戦場の性』「アジア女性基金の功罪」295頁、314—315頁参照。
川田文子『インドネシアの「慰安婦」』明石書店 1997
川田氏と異なる見解に関しては、加藤裕「従軍慰安婦問題をでっちあげ」『月曜評論』第1396号（平成11年7月25

日）を参照。また、インドネシアの慰安婦は志願者募集だという見解に関しては総山孝雄「老兵たちの戦い」『国際新聞』（平成12年12月25日）参照。

- 15 オランダでは、オランダ領東インドに居た人々の記憶を聴き取り記録する作業を大学間共同プロジェクトでおこない、資料はライデン大学に保存されている。英国では大英図書館音声記録部のナショナル・ライフストーリー・コレクションや帝国戦争博物館に個人の音声記録がやはり体系的に数多く保存されている。インドネシアでもオーラルヒストリーの体系的な資料の蓄積が進んでいる。このままでは将来国や民族別に資料の偏りも出るため、今後一刻も早く日本でも同様の作業が必要である。遅すぎることがないように心から願う。また個人の日記・私家版の記録なども貴重な資料であり、一箇所に収集することが望まれる。

追記：展示会の経緯に関しては拙論「拒否されたオランダ『戦争』展」『世界』（2000年4月号 その後の展覧会の模様（大分、福岡、東京）に関しては、『世界』（2001年4月号）を参照。

(中尾知代) 岡山大学文学部行動科学科 ポストコロニアルスタディーズ・表象文化論
連合軍捕虜・元抑留者の聴き取り（オーラルヒストリー）をおこない、彼らの記憶・経験と現代の日本イメージの関連、及び戦後関連問題について研究。
オランダ・アムステルダムにおける歴史社会学会で「捕虜と宗教観」発表。日蘭歴史交流会議などに参加。

論文に「捕虜はなぜ<和解>に頷けないか」（『現代思想』2000年11月号 青土社）

「戦争捕虜問題の比較文化的考察—『食』の問題を中心に」（『季刊戦争責任研究』）

「ヨーロッパを舞う蝶々—英国を中心とした近現代日本イメージの構造（1） 他者・異文化イメージの表象研究・試論」（岡山大学 リテラ最終号2000年）他